

月光魔術團

Ⅲ

幻魔大戦 1

DNA

立ち読み版



【悪竜の日】
LUNATECH



平井和正

Kazumasa Hirai

S

Something was very definitely wrong with her. Akira wouldn't vanish from her thoughts, 24 hours a day. She was always painfully, strongly conscious of his existence,

like a young girl fallen in love.



遊びをせんとや生れけむ、
うま

戯れせんたわぶとや生れけん、
むま

遊ぶ子供の聲聞けば、

我が身さへこそ動ゆるがるれ

梁塵秘抄卷第二

寺嶋女史は、制服の上着を脱ぎ去り裸の上半身を曝さらしている人美を見て、棒立ちになった。黒縁のメガネの下で目が真円に睜みはられた。

「こ、これはなにごとかつ」

思わず口走った。女生徒が上半身裸になり、学校長が二コンを構えている図を見れば、だれでも腰を抜かしそうになるであろう。

あの沈着冷静な寺嶋女史でも、がくつと腰が砕けそうになったようだ。前代未聞の大スキャンダルである。

「無道なっ」

「待つて待つて、そんなんじゃないんですから！」

人美が声をあげたが、寺嶋女史は知らない人間を見る顔に向けただけだった。眸まなこに忿いかりの色が光っていた。

「誤解です、誤解ですつたら！」

しかし、まんざら誤解ともいえない状況にある、と人美は思った。学校長のライノと取り引きの結果、ヌードフォトを撮らせようとしたのだ。うん、これは誤解ではない。

「センセ！ ワタシ人美です！ メイに見えるかもしれない、せんけど、鷹垣人美なんです！ 誤解しないでください、これには説明を要する深いワケがあるんですよ！」

「人美?! キミがあの人美クン？」

こわばった寺嶋女史の顔が半信半疑の表情になって、人美をじつと見つめた。

「ちゃんと証明できますから！ にーなに尋いてくださ

い！ リーミンでもいいです！ ワタシ、ブラック・メイモード変身起こしてしまっただんです！」

眼力を集めてじいつと凝視していた寺嶋女史の表情が崩れた。同時に体を支えきれなくなったように、ふらつと揺れて、背中で学校長室の櫛のドアに凭もたれかかった。

「なんと！ 本当にキミは人美クンらしいな……」

くつくつと声を忍んで笑いだした。抑えた分だけ内向して充満してしまったのか、全身が笑いに震えた。笑い続けながら、苦勞して後ろ手に学校長室のドアをロツクする。

「不用心に過ぎますぞ、ダーリン……」

「すまねえ。つい夢中になっちまってよ」

「ワタシがジツチャンに写真撮ってくれと頼んだんです。

このブラック・メイモード、どうしても記念撮影しておきたくて……だって、この変身っていつまでもつか、わからないんだし」

「驚いたよ、人美クン。キミの遺伝子的暴走はどこまで続くのか見当もつかんな」

ふらふらと磁力に曳かれるように、寺嶋女史は人美のそばに寄ってきた。目は依然として真円になったままで、憑かれたような目つきであった。

「センセ、おめめがまんまるになったままですよ」

「仕方があるまい。人美クンにはいつも肝が失せるほど驚かされる」

「センセにお逢いしたくて探していたんですよ。ダーリン

に遭ったのは、もののついでです。学校に電話したけど、席にいらつしやらないということだったので」

「済まんが、ちよつと肌に触らせて貰ってもよいかな？」

寺嶋女史は、人美のいうことをろくに聞いていなかった。ブラック・メイモードにすっかり魅せられてしまったのだ。「素晴らしい！ このコーディネートはまさに芸術品だ！ これをして造化の妙、というのだろうか、なんともいえない意図的なものさえ感じさせるぞ、人美くん！」

そつと貴重なものに触れるように、寺嶋女史は人美の裸の肩に触りながら、浮かされたようにいった。ブラック・メイモードは、見るものに熱病のような熱に浮かされる感覚をもたらすものがあるらしい。

「意図的なものつて、なんですか？」

「よくはわからんが、これまでの人美クンの変身の変移をずつと見ていると、そんな感想を持つてしまう。変身現象をもたらす、遺伝子的メカニズムのことは見当もつかないが、なにか人為を超える意志のようなものを感じてしまうのだが……」

「あつ、ワタシもそれ、感じますよ！」

人美は共感のあまり熱くなって、声を張り上げてしまった。

「メイ・ウイルスつて、なんだか意志を持っているみたいだつて思ってたんです！ 好き嫌いがあつて、好かれると素敵な変身が起きるし、嫌われると恐ろしいことが起こる

って、そんな感じですよ！」

「本当に素晴らしいね！ 人美クンのいう通りかもしれな
いとわたしも感じるよ。メイ・ウィルスに自由意志がある
なら、是非とも好かれないね。秋菜あきなのように嫌われたりし
たくないものだ」

寺嶋女史は、陶然として人美の褐色の滑らかな肌を撫ぜ
ながらつぶやいた。人美もじわつと快美感が生じて、女っ
て撫ぜられるのがしんそこ好きなんだなあ、と考えていた。
もつとも嫌いな人間から撫ぜられても心地よいどころか、
不快感を得るだけだ。好きな相手のバイブレーションが愛
撫を通じて流れ込み、共感作用が生じるのがよいのだ。

ライノが大きな咳払いをして、寺嶋女史ははっと我に返



った。あまりにも生々しいと感じたのだろう。寺嶋女史の貌がぱつと朱に染まった。

「あつ。済まん！　あまりに肌の感触が素晴らしいので、つい……」

「いーんです。センス、じつちゃんにはもうフォトを沢山撮って貰いました。後で見せて貰ってください。ワタシ、この超素晴らしいブラック・メイモードの自分を、どうしても記念に残しておきたくて。また元の人美に戻ったり男の子モードになったりするでしょうけど、このブラック・メイモード、すっごく気に入っているんです。できればずっとこのまま……あ、嘘です。寺嶋センスのために男の子モードになりますから」

人美の言いぐさは支離滅裂になった。ライノ爺おじいちゃんがにやにや笑いながら、見ているせいかもしれなかった。

「じつちゃんに、恐竜モードなんていわれましたけど、ワタシはぜつたい恐竜変身なんか起こしませんから！　安心しててください！　寝てる間に恐竜に変身してセンスを食べたりしませんよ、本当です！」

「わかった。わかったから、早くその上着を着たまえ」
人美はブツブツいいながら、上着を身につけた。やっぱりブラぐらいしていないと、何とはなしに頼り無い。

「センスにお話があってきたんです。大事な話です」
しかし、ライノの耳には入れたくない話だった。好奇心の強いライノは何をやるかわからない、と人美は思った。

「センセ、保健室空いてますか？」

「いや、今は二人ほどベッドに寝ている。よくわからない症状なので、学校長先生に相談にきたのだよ」

「どうしたね？ 救急車を呼びたいというのか？」

「その必要はなさそうですが、様子がおかしいのです」

「マスコミ攻勢がきびしいせいだろうよ。生徒たちが浮足立っているのだな。いってみれば、神経疲労だ。夏風邪ではないのかね？」

ライノがいかにも学校長らしい口をきくので、人美は驚いていた。巨大なマグナム拳銃など執務デスクの引きだしに突っ込んでいる、荒っぽい稼業の人物とは思えない。

そのライノに対する寺嶋女史も、いかにも学校長という上司に対する、敬意を表す口調で喋っているのだ。

親娘なのに、変わっている、というよりも、その役柄をごく自然に演じているライノと寺嶋女史の不思議な関係に、人美は感じ入ってしまった。

「保健室の来室者が激増しているのです。かなり深刻な情緒不安が、生徒の間に拡がっているのはたしかです。幸い、間もなく夏休みが始まりますから、この傾向は沙汰止みになると思いますか……」

「おぬしのいう通りだろう。来室者の扱いについては、自分で裁量して貰ってよい。まあ、夏休みの間にマスコミの関心も薄れるだろうよ。もっと大きな事件が続発すれば、の話だがね……」

「わかりました。マスコミ報道の偏向が生徒たちにもたらす悪影響、ということ、教育委員会から問い合わせがきているそうですが？」

「別に驚くには足りんよ。一般的にいつて生徒たちは、興奮してはいるが、楽しんでる気配が濃厚だからな。僕は、生徒たちの一部が罹患している神経症のことは、さほど気にしておらん」

ライノが、いかにも学校長らしい権威を纏まとった口調で喋る。とんでもない演技派だな、と人美は思う。それとも生まれつき芝居が達者なのだらうか？

「教育委員会から呼出しを受けているのでは？」

「毒にも薬にもならんお歴々だよ。では、お嬢ちゃん、ちよつと出掛けて、鷹垣人美ちゅうじゃ馬はただ事件に巻き込まれただけだと説明してくるからな」

「わたしは同行しなくてもよろしいのですか？」

「今回はまあ、よかろう。鷹垣人美ちゅうウチとこの学校の生徒会長がいかに献身的な素晴らしいことで人望を集めとるか、証拠を山ほど見せてやるからな。マスカレード・ナイツちゅう跳ね上がり、鷹垣人美とはなんの関係もないと証明し尽くして見せるわい」

まだ何かあるか、と思っただけだったが、ライノはそのまますつと学校長室を出ていってしまった。まるでマジックで騙された気分だ。

「あー、センス。じつちゃん何をする気なんでしょうか？」

まさかワタシのフェイクを出して、ワタシの無実を晴らしてくれるとか？」

「まさか、そんなこともせんだらうが」

寺嶋女史は用心深く、学校長室のドアの錠をロックしに行った。ドアを背にして、思慮深い目でじつと人美を見つめる。

寺嶋女史の、その思慮深さが人美は好きである。しかし、もしかすると彼女は人美ににじり寄られるのを避けているのかもしれない。

「センセ。何を警戒なさってるんです？」

「いや。また人美くんが難題を持ち込んだような気がしてな。さつきいつていた恐竜変身とは何かね？」

「それなんですよ、センセ……」

人美は吐息をふうつと漏らしてから、おもむろにいった。「リーミンから何も聞いてませんか？」

「いや。なにも……だいたい彼女は今のところ、勤務状況が非常に悪い。欠勤続きで問題になっている」

あらためて新たな懸念を催したのか、寺嶋女史はドアを離れて、ゆっくり人美に近づいてきた。結局、寺嶋サンに心配をかけちゃうことになるんだな、と人美は思った。

「申し訳ないです。何か起こると、かならずワタシが絡んでしまつて、ご迷惑をかけてしまつて」

だいたいの事情を、寺嶋女史は深刻な表情で聞いた。これまででない深刻さだと思わざるを得なかった。尻尾が生

えたとか巨大陰核とかいうレベルとは比較にならない。

「ご心配をおかけして、というべきだな。わたしも気持ちが悪くなるくらい心配していたぞ。人美くんが三日三晩、眠り通していたと聞いて、わずかに気持ちが悪れたが」

「ご連絡が遅れてごめんなさい。なにしろマスコミ報道関係者が火炎放射器みたいに火い噴いてるだろーなーと思つて……もしかして、盗聴だつてされかねないでしょ？」

「大変なことになったな。わたしの想像を超える事態だ」寺嶋女史の言葉には実感がこもっていた。それはそーだろーな、と人美も思う。大変度のレベルがこれまでとぜんぜん違う。天地雲泥の差とゆーのだろーか。

「どーにかなりませんか？」

「無理だな。解決不能としかいいようがない。なぜ、ダーリンがいる時に、相談を持ちかけなかった？」

「だって、ダーリンに相談するなんて考えもしなかったし。外国マフィアから金を巻き上げるような人間でしょう？」

それは羽目を外してるけど、恐竜変身つてキメラリゼーションに分類されるんでしょうか？ 畑違いですよね」

学校長の執務デスクの椅子に座っているのは、寺嶋女史ではなかった。人美だった。不遜だなど一瞬たりとも考えない。執務デスクの引出しには、でっかいマグナム拳銃や女レポーターのヌードフォトが入っていることを知っているからだ。

いや、ヌードフォト自体は人美の制服のスカートのポケ

ツトにずっしりした重みとともに納まっている。こんなものがだれかの目に触れたら、とは考えない。

人美は、深謀遠慮の寺嶋女史と正反対の性格なのだ。しかもその精神内部には、人美2号からn号まで詰め込まれている。衝動的であるのはトーゼンなのだ。

「すると、ともかく人美クンの考えでは、その肉食恐竜のベロキラプトルは人美クンの知り合いのどれかであるらしい、というのだな？ 人美クン、ひとつ尋きたいが、その容疑者の中に、このわたしも参入しているのかね？」

寺嶋女史は、学校長に引見される生徒といった恰好で、所在なげに立ったまま、剥き出しの二の腕を交差させた掌で撫ぜていた。

「センセ、もっと近くにきてくださいよ。リストには、ワタシの知り合いを一応網羅してありますけど、容疑者リストってわけじゃありません。センセ、そんなにワタシってアブナイですか？ 気をつけないと何をされるかわからないですか？」

「いや、そんなことはないが……いつもの人美クンと違うので、つい」

「にーななんて、いつもの人美クンでも厳戒態勢ですよ。ワタシに何をされるかわからないってゆーんです。可笑しいですよ。立場が逆だと思っただけ」

寺嶋女史がそろそろと執務デスクに近づいてきた。関心はあるのだが、本能的な危険のシグナルをキャッチしてい

るといふ雰囲気であつた。

「人美クンの獲得遺伝子とでもいったものの正体がわからないのでな。人美クンはもしかして、自分の望む形態を獲得する超常的能力があるのかもしれない。それで、にーなは警戒しているのではないかね？」

「あつ。それはにーなにいわれました。オレに化けるなつて何度も。ワタシ、にーながとつても素敵だから、出来ればにーなに変身したいつてゆつたんです」

「やっぱり……」

「でも、ワタシは本気でにーなに変身したりしないと思う。それは寺嶋センセだつて同じです。だつて、にーなやセンセがそつちにいるのに、ワタシがにーなやセンセに変身するつてバカげてますよね？　ワタシがメイに変身するのは、メイがもうこの世に存在しないからです。もうどこにもいないメイを再現しようとワタシの潜在意識はしてる、と思うんですけど」

こつちへきてください、と手招きしながら、人美は制服のスカートのポケットを探った。そこに入っている紙切れを取り出そうとしたのだが、何枚かのナマ写真もいっしょに引つ張りだされて、バラバラと下にばらまいてしまった。「うわつたつ」

寺嶋女史がすいと身を屈めて、落ちたナマ写真を拾おうとしたので、人美は変な声をあげてしまった。

「あつ」

ナマ写真を一目見て、寺嶋女史は慌てて、離れようとした。人美は手を延ばして、逃がさじと寺嶋女史の手首を握った。

「待って！ 誤解ですう！」

「厭らしい！ 人美くん、まさかキミはそんな趣味があったのではあるまいね!？」

「違いますよう！ それはただの証拠写真です……ワタシの趣味じゃないです」

「人美くん、キミはまさか男の子になると、恋人のえっち写真を撮りまくるといふタイプではあるまいね?」

「ですから、違いますったら！ 約束します！ センセと結婚しても、厭らしい写真なんかぜったいに撮ったりしませんから！ 誓います！」

「本当だね？ こんな厭らしい……」

「嵌めどりでしょ？ ワタシは大事な大事なセンセを汚すような真似はしません！」

「しかし、人美くんはなぜそんな言葉を知っているのだ？」

手を握られると、寺嶋女史は少し軟化したか、かえって警戒心は増大したような気がした。

「だってワタシ、博識な女子高校生ですから……このことはどーか忘れてください。第一、ワタシが撮った写真じゃありませんよ」

「しかし、よくそんな大胆な写真を他人に撮らせるものだ

……」

「そうですよね。マインドコントロールされてるんでしょうか？」

寺嶋女史は、なにかいいかけて、黙ってしまった。迂闊な発言を避けたらしい。きつと、寺嶋女史は人美に対して発言を避けることが沢山あるのだ。

「人美くん、キミはわたしと本気で結婚する気かね？」

その代わりの一言は、人美を元気づけた。隠し事を沢山していても、やっぱりまーちゃんは可愛い。

「本気ですよ。センセを可愛がるのがワタシの夢です。相性最高だと思ってます。でも、センセはあと五十年経っても、今のまま、綺麗で魅力的なんでしょうね」

「その言葉、今度男の子に変身した時にもいえるかね？」

「当たり前でしょう！ ワタシ、センセに夢中ですよ！五十年後にも、同じ言葉がいえますよ！ 神様に誓います！」

人美は手を延ばすと、身近にきていたまーちゃんの腰をぎゅっと抱き込んだ。

「あつ、こらっ。それはまだ早い！」

「いいじゃないですか。じっちゃんの許可を得たんですよ。もう婿殿って呼ばれてます。まーちゃんを引き受けたお礼までいわれました。だから、誰に恥じることもなく、ワタシはセンセの婿殿です」

「そ、それは、男性変身時に頼む。今はそんなことをされ

ても、困惑するだけだ」

「そうですね。センセはノーマルでストレートですしね。レズ伝道師のマンガとは大違いだし。このリスト、見てください」

人美はそれでも手を放さず、左手で寺嶋女史の腰をぎゅっと抱いたまま、デスクの上に紙片を拵げた。

人美の関係者リストだ。考えられる限りの氏名を網羅してある。

「恐竜変身者が出たのは、四日前の深夜です。ですから、このリストの中でアリバイがある者は自動的に除外されます。織部倫子おりべみちこは翌日から登校してます。千鶴珠子ちかくたまこは休んでいます。ジヨーも欠勤。西崎先生にしきみぎも欠勤。万田先生も欠勤。ワタシの母親は翌日には帰宅していました。理事長のるみなについては不明です。寺嶋先生は出勤。ライノじつちゃんも出勤。秋菜は継続的に欠勤。アリバイがあるのは、ワタシ自身とにーな、リーミン、それにクロです」

「この沢口様さわぐちというのは誰だね？」

「あ、それは他校のワタシのお友達です。キンパツの犬神アキラは登校してました。マリリンは不明です。マリリンはご存じですよね？」

「沢口様のアリバイはあるのかね？」

「不明です。でも、沢口様が恐竜変身するはずはぜったいにありません」

「それはなぜだ？」

「なぜなら、とつても崇高な人格をお持ちだからです。サワグチさまに限って、それはぜつたいありません」

「しかし、それは単なる思い込みにすぎないのではないかね？ 人格が崇高であるかどうかは別にして、まずアリバイを確認すべきだと思うね」

「それはそうなんですけど……サワグチさまに限って」

「よく親馬鹿の両親が、警察にご厄介になつて非行少年について、そうした表現を使うものなのだが」

「それはわかるんですけど」

「サワグチさまは、人美クンにとって特別な、大切なひとらしいね？」

「いやっ。違いますよ！ ワタシはただサワグチさまを女神様だと思つて、深く尊敬し、崇拜しているだけで……やつぱり親馬鹿と似ていますか？」

「うむ」

寺嶋女史はきつぱり、といった。その語気には気迫が漲つており、人美は反論するのをやめるしかなかった。自分でもわかつていたのだ。

「キミが特別扱いすることは、裏返すと容疑者リストの上位に入る、ということの意味しているよ、人美クン」

「そ、そんなこと」

「愛しているのかね、そのサワグチさまを？」

「違います！ ワタシが愛しているのはセンスです！ まーちちゃんと呼んでもいいですか？」

「ダーリンは婿殿、といったのか？」

寺嶋女史は溜め息をついた。なんだか切なげな溜め息で、人美は気になった。

「いいました。で、いけませんか？」

「学校以外でなら……わたしはどうも、正気ではないな」

「そんなことないです。まーちゃん、愛してます。大好きです。ワタシの嫁になってください」

「それを、だれにでもいいまくっているのではあるまいな？」

人美はまーちゃんの腰を抱く手に力をこめて、言葉を遮ろうとした。やはり人美が男の子モードでないと、寺嶋女史の反応が鈍い。猜疑心が強まって、人美の言葉をすんなり受け入れてくれなくなる。

「今度、男の子モードでまーちゃんを訪問した時に、もう一度この話をします。今は済みませんが、このリストの検討に協力してください」

寺嶋女史の手が延びてきて、人美の頭を撫でてくれた。おずおずとした撫ぜ方で、噛まれるのではないかと心配しながら、見知らぬ犬を撫ぜているようだった。

「それでは、男の子モードの人美クンを待つことにして……このリストから容疑者を割り出すのは無理だ。情報が必要だ」

「ジョウなら、必要な情報を提供してくれると思いますか？」

「生憎、ジヨウは失踪中だ。もうあまり頼りにならないと
思う」

「困ったなあ。全員にあたらなないとやっぱりだめですか
ね？」

「何をいつているんだね？ 人美くんは強力な魔法使いで
はなかったのかね？ その魔法パワーを使えば、容疑者な
どすぐに割り出せるのでは？」

「ワタシの魔法、相変わらず頼り無いです……レスポンス
が一定してないとゆーか。アクセルを踏むとすぐに反応せ
ずに、しばらく経ってから急にタコメータが跳ね上がるっ
て感じですよ。これって、暴走してるのといっしょですよ
ね？ たとえばピンチになって、人美2号に引き渡そうと
しても、即座に引き継ぎができなくて……」

四日前の深夜の出来事を、人美は寺嶋女史に話さなけれ
ばならなかった。明け方近く、廃水を湛えたプールサイド
で、肉食恐竜と渡り合った時のことをだ。

「すると、人美くんは、その人美2号という男の子の別人
格にハンドルを譲ると、記憶はまったく無くなるのか
ね？」

「それが、多少はあるんです。全部ではないですけど、何
が起こったかぐらいは覚えています。夢の記憶みたいな感
じで……しばらく経つと忘れてしまったりしますね。でも、
ワタシ昔からひどく忘れっぽいので、おなじかも」

「人美2号、というキャラクターは、積極的に冒険好きと

「いう男の子キャラだというのだね？　しかし、人美くんが実際に男の子モードになっている時、今の人美クンの意識の状態は持続して、人格的統一は崩壊しない？」

「崩壊しません。ただ、バトルになると、人美2号が出てきます。バトル好きみたいで、元気澁刺はっらつとしてます。ワタシは面倒くさいので、ソイツに渡して引っ込んでしまいますけどね」

「自分の中に多重人格……複数の自我が存在するというのは、どんな感じかね？　鬱陶しさを覚えないか？　対立抗争があつたりするのだろうか？」

「あつたとしても、たいしたことありませんよ。ワタシ自身が気にしていませんから。普通の人間だって、気分が変わるってことあるんだし、ワタシの場合もそうです。センセだって、良心と悪魔が闘うってことあるでしょう？」

「おおいにある。今も闘っているよ」

「どちらが勝ちますか？」

「悪魔が勝ちそうな形勢だね……いつもそうだが」

「つまり、ワタシに関する限り、悪魔は常勝將軍つてわけですね！」

人美はうれしくなり、さらにまーちゃんの腰にかけた手に力をこめた。みっしりと女肉のみちたなまめかしい感触は、女の子モードの人美ですら、胸をどきどきさせる力があつた。

「ライノじつちゃんから媚殿と呼ばれたつてことは、すで

に婚約成立ということ、センス、景気よくお祝いしましょう！ この容疑者リストの全員を招待して」

「人美クン、それはちよつと早計だよ！」

寺嶋女史があたふたするのが楽しかった。

「センスはいつもマジメなんだから」

「からかったんだな？（寺嶋女史は本気で溜め息をついた。）人美クンは本物の魔法使だからね。まさか、と思つても、つい本気にしてしまう。しかし、人美クン。わたしと結婚するという言葉はうれしいが、やはりキミについておくべきことがある。これだけはしっかりと聞いておいて貰わなければならない……わたしは、人美クンが思つてゐるような女ではないかもしれぬよ。キミはただ、わたしという女の表層だけを見ている。中身のことまでは考え及ばない。そのことをよく考えておくべきだ。わたしの立場からして、人美クンには十分な猶予の時を与えなければならぬからね」

「そんなこと、心配ないです！ だいたい魔法使いって、熟慮なんかしないんですよ。閃ひらめきと直感です。魔法パワーが決めるんです。だから、理性や知性が出る幕つてありません。でも、センス、魔法つて楽しいでしょう？ たとえ何百年人間が長生きしたとしたり、魔法と無関係な人生なんて意味なしですよ！」

「人美クンの魔法、信じていなければ、不安で居ても立つてもいられなくなるだろうね。願わくば、その魔法がずつ

と長続きしてくれることを祈るのみだ。わたしは、時々、自分の頭がおかしくなっていることを確信するのだよ。ああ、これは夢だ、夢を見ているに違いない、と思い込もうとする。夢ならば、きつといつかは醒める……そうは思うのだが、ふつと考える。もし、この夢が醒めて、どうなるというのだろうか？ 現実が戻ってくるとしても、その現実には白々として灰を咬むように味気ない。世界はじり貧状態で、とめどもなく悪くなって行く……学校の内部は、生ゴミをばらまいたようになって、極悪の校内マフィアとレイピスト団が巣くっている。だとしたら、こんな現実が戻ってくるのを、自分は期待すべきだろうか、と」

「その通りです。魔法がかかっているなら、それが破れないように、維持しなければ。元はといえば、メイがかけてくれた素敵な魔法です。だから、ワタシ跡継ぎになって、魔法を継続維持しなければって思うんです。ワタシ超夢使いですから、この素敵な超夢を是非とも現実化させなければって」

人美は、自分の頭髪をやさしく撫ぜている、まーちゃん寺嶋センセの手をとって、キスした。決意が再び確固とした姿を現すのを感じていた。

「で、センセ。この容疑者リストの中から、容疑者を選ぶのって、どーすればいいんでしょうか？ やっぱひとりひとり直接当たっていくしかないですか？」

「ダーリンに頼むのが最短距離だろうな。最初からそうす

べきだった」

寺嶋女史の返事は簡潔そのものだった。他に解はない、という趣きが感じられた。

「セ、センス！ もっと早くそれをおっしゃっていただければ！」

「しかし、恐竜変身の話は、たった今人美クンの口から聞かされたのだよ」

なぜ、早く電話を入れなかったのだ、と寺嶋女史はいい、当然のことながら、人美には返す言葉がなかった。

余所で他の女に逢っていたのだ。これって、やっぱりまーちゃんにとっては、人美の不実になるだろーか？

「教育委員会ってどこですか？ ワタシ、おっかけてじつちゃんに談じ込みますから、教えてください！」

「区の教育委員会は……いや、都だったかな？ そう慌てずに、もう少し待ちたまえ。それくらいベロキラプトル変身人間も待っていてくれるだろう……」

「センス、さつき変なことおっしゃいましたよね？ ワタシが特別扱いするのを裏返すとなんとかになるって……それって何だかとても暗示的です。つまり、ワタシは無意識のうち、容疑者リストから、真犯人を取り除こうとしている、そーゆー意味ですか？」

「人間というものは、無意識のうちに、自己欺瞞を行う生き物なのだ。つまり、そのひとを信じていたい、疑いたくない、という思いを、知らず知らずに正当化してしまうの

だ……わかるだろう？ 人美クンはわたしを真犯人だと思うかね？」

「思いません！ そんなこと莫迦げています！ だって、センセにはアリバイがあるんでしょ？」

「あるかもしれないが、ないかもしれない。アリバイ崩しは探偵小説の名探偵のメインの仕事ではないかね？ 率直にいうが、わたしには当夜のアリバイはないと思う。わたしは独り身だし、アリバイを証明してくれる人間はいない。たまたまダーリンが居合わせるということもなかった。ダーリンは女の子に夢中だからね」

寺嶋女史は、執務デスクに散乱している、有名美人レポーターのエッチフォトに向かって顎をしゃくった。見るのも忌まわしげであった。

「でもワタシ、センセの言葉を信じますよ。センセは嘘をつくようなひとじゃないから。センセが自分はベロキラプトル変身者だと告白なされば信じますが、否定なされば、それも信じます」

「やれやれ。キミは名探偵にはなれないよ、人美クン」

「トーンですよ。ワタシは魔法使いで、名探偵じゃないんですから。でも魔法パワーは結構あります」

「その直感が、この場合はアテにならないのだよ。キミが信じたくないとしんそこ思っていていれば、直感はキミを裏切る。それも手ひどく裏切るだろう」

寺嶋女史はなぜか、ひどく重々しくいった。アポロ神殿

の神託を下す巫女^{みこ}、という雰囲気があって、人美はちよつと気押された。

「気をつけます……でもなー、サワグチさまが恐竜変身の容疑者ってゆーのはなー、ちよつとなー」

「ほら、見たまえ。すでにキミの目はサワグチさまについて曇っている。では、サワグチさまを容疑者リストから外すに足る、人美クンの根拠はあるのかね？」

「だって、サワグチさまってとつても清楚なかたなんですよ。マジメだし、夜遊びなんかしないし、凄い霊能者で人望は高いし、ワタシなんか自然にあの御方の前では、ひれ伏してしまいそうになります……」

「今いったのは、全部人美クンの主観にすぎないよ。なにひとつ事実による裏付けというものがない。よく思い出してみたまえ。そのサワグチさまの言動で、これまでに何か気になったことはないのかね？ なにひとつ心当たりがないと本心からいえるかね？」

「センセ、そんな、容赦ない検事みたいなことおっしゃらないでください！ センセだって、サワグチさま、ご存じじゃないですか？ とつても清潔な素敵な女子高校生だと思いませんか？」

「ワタシの印象は、人美クンとは違う。彼女は、人美クンと同程度に奔放不羈なものを感じさせる。自分の欲するものを取るのに、遠慮はしないし、抜群の行動力があるとわたしは評価するね。考えても見たまえ。あの湘南海岸のガ

ーデン・プールで、彼女が誘拐団の若者を溺れさせた果断さと実行力、人美クンにすらあるとは思えんぞ。彼女は、人美クンが思っているような人間ではない。楚々として、清純には見える。だが、内容はまったく違う。人美クンの思い込みの強さが、彼女の内実と外見の落差によって、別人に等しい評価を生ましめるのだ。考えたまえ。思い当たることがいくらかもあるはずだ」

寺嶋まーちゃん女史は、一気呵成に喋った。その言葉の勢いと滑らかさの間に、人美が言葉を投げ入れることをなかなか許さなかった。

「わあつ。まーちゃんセンス、よくお喋りになるんですねーっ。参りました……でも、そういうえば、思い当たることがひとつだけあります……」

「ほら見たまえ。かならずある、といった通りだろう！」
「そんなに悦に入らないでくださいよう。でも、夜遊びしないというのは取り消しにします。セントラル・パークでドラゴン・チーマーに襲われた夜は、サワグチさまから食事に誘われたんです。もし、サワグチさまが危険なセントラル・パークをそぞろ歩きしたいといわれなかったら、ドラゴン・チーマーとバトルすることにはならなかったはずなんです。ですから、サワグチさまは決して夜遊びなどしない、謹厳実直でひたすら清らかな聖女のようなかただとはいいません。前言を撤回して、ここに謝罪致します」
「率直に誤りを認めることは賞賛に値するが、果してそれ

だけかな？ もっとじっくり記憶を洗い出してみる必要があるのではないかな？」

「あつ」

人美の顔色がさつと変わった。電流のような不快な感触で、あの記憶が甦ってきたのである。サワグチさまが、本当の自分は、決して人美が思っているような上等なものはない、と告白した記憶だ。

「ははあ。やはり思い当たることがあったか」

「いや……センセ、ワタシ気持ちが悪くなりました。その長椅子に寝てもいいですか？ 食あたりしたようなすごく厭な気分です……」

本気で、人美はいった。むかむかして吐き気が蠢めいいていた。なにかひどい流神的なことを自分がしでかしたようだった。

「大丈夫かね？ 手を貸そう」

まーちゃん寺嶋センセの固太りのしっかりした掌すがに縋すがって、人美は長椅子に仰臥した。ぶくぶく肥大したような革張りの長椅子が不快だった。いや、長椅子ではなく、不快さは自分の裡にあった。

「センセ、気分悪い……サワグチさまを疑ったら、とたんに猛烈にシツクになりました。きつとバチがあたっただけです」

「大丈夫だ。人美クンの魔法パワーは強い。その呪力で自分を縛っていたから、それに反する自分に跳ね返ってきた

のだ。しかし、真実から目を背けることは、魔法使いにとつては更に許されざることだ。違つかね？」

「そうですね。魔法使いは……自分を誤魔化してはならないんです」

「だったら、しゃんとしたまえ。サワグチさまはいい子だと思うよ。だが、女神様ではない。過ちも犯すし、良心を裏切りもする。それは人間だからだ。人美クンがサワグチさまを女神様扱いすれば、彼女の正体がわかった、と人美クンが思った時、とんでもない反動が生まれる。今のうちに真実に目を開くことが、どんなによいか知れない。彼女は人美クンと変わらない人間なのだ。人美クンの裡にある欲望や邪心は、そっくりそのまま、サワグチさまという女の子の裡にもあるものだ」

「そ、そーですよ。トーゼンそーですよ。でも、そうじゃないと思いたがつている自分が存在して……それに反抗したので、ワタシパニツシユメントを受けているみたいですよ……」

「人美クンの魔法パワーがどんなに強いか、自覚しただろう。しかし、なぜ人美クンはそれほど強い拘りを持つのかね？ 素敵なお友達、というレベルでは済まない何かがあるのかな？ たとえば、彼女に恋をしているというよう
な」

「違います！ 恋愛感情なんかじゃないです！ 第一、ワタシはストレートです！」

「恋愛感情ではないが、彼女を神聖化し、崇高な存在としたいという欲望がキミの裡に存在するということだな？ その感情の正体は何だと思う？」

「わかりません。なんだか、自分が熱狂的な信徒みたいな気がします。つまり、サワグチさまは女神様で、人間を超えた存在で、そのサワグチさまに自分を無にして仕えたい、献身したいというような、強い欲求です」

「なるほど……それは彼女が強いレベルの霊能力を持つ、巫女的な存在だからかな？ 人美くんもまた、レベル的には相当に強力な霊能力の持主では？」

「でも、ワタシは、自分に霊能力があるから惹かれるという感じはしません。やっぱりサワグチさまが女神様だから、ごく自然にお仕えしたいと……」

「しかし、肝心の彼女は、自分の女神性を否定しているのではないのかね？」

「それはそうなんですけど……」

人美は言葉に詰まった。反省力に乏しい人美は、自己分析が極度に苦手であった。反省などより行動するほうが好きなのだから、仕方がないと思っていた。

今、改めて、論理的に寺嶋まーちゃん女史に問われると、答えようがなくなつた。もともと深い考えはないのである。直感だけで行動する人美には、論理性が苦手であり、単に飛び越えていけばよい障害物のようなものであった。

「たとえば彼女が自分の女神性を否定しても、人美くんはあ

くまでも信じていたいというわけだ。その意味では、宗教の信徒のレベルにあるといえる。人美クンの内部には、その執着によって支えなければならぬものが存在している。それは何かね？ 自我が崩壊する危機にある人間ととてもよく似ている。もし、人美クンがサワグチさまを女神様だと思えなくなった時のことを考えたことがあるかな？」

「いえ。そんなこととても考えられないし……きつと胸が悪くなると思います」

「なるほど、今人美クンに生じている生理的な不快感が、彼女への不信から遠ざけようとするわけだ。人間は自我を守ろうとする本能があると思う。自我こそ自分自身そのものだからだ。自我を否定することは人格的崩壊にも繋がると感じるので、必死に自我を防衛する。崩壊した宗教の信徒には起こりやすい心理だ。現実を否定してでも、自分の自我を護ることに熱中する。しかし、人美クンはなぜ自我を守ろうとする？ サワグチさまが女神様でなくなると、とても困る事態が生じると思っているのかな？ 素直に自分自身を見つめた時、何が見つかるだろう？」

「わかりません。でも、すごく心細いです。自分自身が無くなってしまふような恐怖なのかも……それで気持ちが悪くなったのかも」

「つまり、人美クンの深層意識には、自己喪失の恐怖が潜んでいる。しかし、人美クンは自分の多重人格性を認めていて、しかもそれを拒否しようとしなない。むしろ、反対に

受容的といえよう。だとすれば、何が人美クンを自己喪失の恐怖に誘っているのか、ということだな」

「もし、自分の深く信じていた神様のような教祖様がインチキだった、詐欺師だったとわかった時の信徒がどんな気持ちになるかってことですよ？ ワタシ、なーんだ、そーかあ、と感じると思うんです。がっかりはするでしょうけど、自我が崩壊したりする恐怖は感じないと思う。しょーがないよなって、すぐに諦めてしまつかも」

「しかし、サワグチさまがそうだったとは思いたくないのだな？ キミにとってのサワグチさまは、インチキ宗教の信徒にとっての教祖様と、どう違うのだと思う？」

「だって、サワグチさまは素敵ですよ。偉ぶらないし、爽やかだし、綺麗で清楚だし、ああっ、女神様だなあって思います」

「人美クン、当のサワグチさまが自分は女神様じゃないと認めているのに、人美クンはそれを否定しているのだよ。サワグチさまが、自分は人美クンが思っているような崇高な人格者ではなくて、普通の女の子でしかないのだ、といっているのに、人美クンはそれを認めないのだ。わたしはその理由を知りたい。人美クンは真実よりも幻想を信じたか、と思っているのかね？ キミは超夢ということをいうが、現実を否定して、超夢を信じるということなのかね？」

「ああっ」

それほど大袈裟に呻いたわけではなかった。あ、超夢の

ことをすっかり忘れていた、と気づいて驚いただけである。そういわれれば、サワグチさまは現実存在ではなく、超夢の登場人物のような気がすると認めねばならない。

現実などはどうでもよい、と人美はもしかすると考えているのだろうか。超夢のほうが素晴らしいなら、超夢に安住したほうがよい。

サワグチさまは現実の存在でなく、超夢の存在であるなら、現実など捨て去ってしまつて、超夢のサワグチさまを選ぼう。

ううん、と人美は思わず唸つてしまった。もし、自分がそんなことを考えていたとしたら、びっくりする。

でも、超夢のほうが素敵だったら、超夢を選ぶのつて、とつても自然だと思うのだ。もし人間がだれでも、選択する権利を与えられたら、現実より素敵な超夢を選ぶんじゃないかな。

「でも、今のまいちゃんセンスが超夢の存在だったら、ワタシーも二もなくこの世界を選びますよ。そんなこと、考えるまでもないことです」

「人美クンのいうことを聞いていると、いつの間にか、この世界が超夢でも現実でもよい、という気分になつてくる」

まいちゃん寺嶋センセはくすつと笑つた。人美のペースに巻き込まれた、といわんばかりだった。

「ただ、人美クン。今、キミが気分が悪くなつたという理

由、もう少し突き詰めて考えてみることを勧めるね。なにかあると思う。なぜかというところ、人美くんはその程度のこととで、恐怖を覚えて気持ちが悪くなったりしないという気がするからだ。今はどうだね、人美くん？ まだ気分が悪いかね？」

「いえ、もうダイジョーブです。すっかり治りました」

人美は風が舞うようにすつと体を起こした。あの異様な、なんと名状しがたい気分の悪さはすっかり去っていた。

「なんなんでしょうね？ でも、まーちゃんセンセに示唆をいただきましたから、ワタシサワグチさまにお逢いしてこようと思います。サワグチさまってゼツタイに悪竜変身なんか起こさないですよ。もし変身を起こすとしたら、可愛い綺麗な妖精って感じがします。メイ・ウイルスって独自の意志があるような気がするんです」

「だったら、秋菜に逢ってはどうかだね？ 彼女は、メイにとっては好意的になれない人間だったという気がする。その気分が、メイ・ウイルスを支配した……そうとれないこともない」

「秋菜にはあんまり、逢いたくないんです」

当然、なぜかと尋かれるだろうな、と思いつながら人美はいった。秋菜に性交を迫られたことは、まだ寺嶋女史には告げていない。

単に忘れてただけなのだが、なぜ忘れたのか、と尋かれれば、答えようがなかった。寺嶋女史には、なんの隠し事も

なくなんでも告げているのだから、故意に忘れたというのではないが、それがいかなる深層心理に基づく忘却作用なのか、彼女は知りたがるだろう。

「秋菜に迫られたのだろう？」

寺嶋女史は、人美の考えの先を行っていた。そんなこと、どうしてわかるのか？

「アタリです。秋菜って、わたしがナントカ因子製剤の代わりになると思ってたみたいですよ。彼女、巨大陰核のキメラリゼーションで相当アタマにきてましたから」

「秋菜も外観と内実の落差が大きい女だ。彼女が帯びている伝説的なものが、どれだけ真実に近いか疑問だがね」

へえっ、と人美は思った。つまり寺嶋まーちゃん女史は、秋菜のハーバード大ロースクール卒の光輪を帯びた学歴が、真実ではない、と示唆しているらしい。

「でも、センス。なんで秋菜は、ナントカ因子製剤のことを知ってたんでしょう？ 特別の知識が秋菜にあったという事は、つまり……」

「インサイダー・グループに彼女は属していた」

人美が言葉に詰まったのを、寺嶋女史は助けた。でも、インサイダー・グループってなんだろう？

「秋菜は、世界支配グループの意を受けていたということだ」

「世界支配グループ？ 神話人種のですか？」

「違う。文字通り、人類の世界支配グループだ。隠れた世

界政府というような言葉を聞いたことはないかね？」

「ありません。へー、そんなグループがあったんですかあ。世界制覇の秘密組織って、本当に実在するんだあ」

素朴に、人美は感心していた。そんなのはマンガとか小説の、フィクションの世界のことだけだと思っていた。

「それで、キメラリゼーションのことをよく知ってたんですね。で、秋菜って、諜報員ってゆーかスパイだったんですか？ メイのことも、メイ・ウイルスのことも予め知っていて、張り込んでいたとゆーか」

「ま、そういうことになるかな。だから、特別の知識を持つていても不思議はないわけだ。人美くんが求めている情報は、秋菜に近づくのが一番早道だろう」

「でも、秋菜って学校長室を半壊させてしまったから、もう退職したのでは？」

まだしていない、と寺嶋女史は答えた。退職届も提出されていないし、解職の手続きもなされていない。手続きとしては、学校長室の什器を傷つけた損害賠償の請求が進んでいるらしいが、秋菜の所在が不明なので、それも滞っている。

「無責任だなー。それなのにクビにすることもできないなんて」

「概して学校の事務の手続きというのは、そうしたものだよ。重大な不祥事を起こした教諭がいても、温情主義から解職はなかなかされない」

「そういえば、忍者みたいに学校に隠れ住んでいたのがいいましたよねえ。ジヨウってまだアパートとか居住空間持っていないんですか？」

「ホームレス状態のようだな。しかも、ジヨウは途中で性転換してしまったから、問題は複雑かつ厄介だ。結局は退職することになるのだろうか」

「それも可哀相だな。解職したりして、ジヨウが訴訟を起こしたりしたら、どうなりますかね？　またウチの学校、トピックですね」

「で、秋菜はどうするね？」

寺嶋女史は、人美のあちこちリープする話題に、少々疲れたようであった。やっぱり悪い癖だな、と人美も思う。あまりにも目まぐるしくて、みんな疲労してしまうのだ。

「ジヨウに逢いたいです。連絡、つきますか？」

「今は無理だ。所在不明だからな。向こうから連絡してくるのを待たなければならぬ。しかし、ジヨウも愚かではないから、そのうち男性に復元して戻るかもしれないね」

「わかりました。とにかくワタシ、サワグチさまにお逢いしてきます。何か手掛かりを掴むまではぼーっとしていられます」

人美は、まーちゃんのしつかりした固太りの掌を掴んで持ち上げ、自分の頬に無闇にこすりつけた。本当に実の母親の掌のような気がする。あの阿呆ママは、ずっと実の母という気がしないまま、育ってきたのである。

「センセ。今度はかならず男の子モードになって戻りますから、待っていてください。満月シーンがくるまで、待たなくてもいいような気がするんです」

「それはまた、どうしてだね？」

「だって、ワタシストロングな魔法使いだってこと、思い出しましたから」

人美は気力を奮い立たせて答えたのだった。

人美はこれまで、マジで忙しいということを知らなかつたようだ。

その多忙さは、リストアップされた人々と早急に、個人面接をしなければならぬ、という義務感によって生まれた。

人美の前には、幾多の障害が存在した。時間的制約がもっとも大きな障害になりえた。だれかがいった通り、メイ・ウィルスは悪魔的な悪竜変身を次々に起こすかもしれない。それを押し止めるのは、今のところ人美を除いて他にない。

これって、あんまりだ、と人美は不服をいいたい。オトナたちだっていないわけではないのに、なんで人美が独力で奔走しなければならないのだ。

ま、仕方がない。いつものことだ。独り生徒会の人美にとって、ごくごく当たり前の状況といえた。人美に課せ

られた天の試練とでもいうか。さもなければ、到底阿呆らしくてやっていられない。

時間の制約の中では、通信手段が重要である。しかし、人美の所持していたケイタイは汚水プールに水没し、敢えない最期を遂げた。

人美が自前のタンマツやケイタイを入手するには、国家発給の身分証明が必要である。ブラック・メイモードの現人美には、入手するあてがない。

人間、困った時には友人が必要だ。しかし、今の人美は即座に友人を手に入れる時間が不足している。八方塞がりになるのは避けられない。

学校の内部でうろろしても、打開のすべはない。大急ぎで、通信手段を確保するにはどうすればよいか。

しかし、人美にはまだ運があったようで、校庭に出ると体育授業の生徒たちの中に、愛しい生徒会のコーハイを発見することができた。

男顔の美少女タキグチは、見知らぬ他人を見る目で、人美を見た。しかし、気になるらしく、いったん目を逸らし、ちらちらと何度も視線を送ってきた。

なにか感応するものがあつたのであろう。しかし、ブラック・メイモードの人美は、どこへいっても、その場の全員の視線を独占する魅力を有する。男顔の美少女タキグチもそのうちの一人にすぎなかった。

人美が視線を男顔の美少女に貼りつけて、顎をしゃくる

と、タキグチは自分が指名されたことに自信がなく、何度も周囲を見回したあげく、そろそろと近づいてきた。

「タキグチよ、ワタシだ。鷹垣人美だ。驚いたか？」

そんなアホなせりふを吐く人美を、男顔の美少女は狂人を見る目で見なかった。最初から感応するものがあつたからだ。

「本当ですか？」

そのせりふも相当にお莫迦であつた。体育の授業中の生徒たちは全員、ブラック・メイモードの人美に目を吸い寄せられ、体育大学を出たての若いそばかす顔の女性教諭は、なんとかさせねば、と思いつつもつい、ブラック・メイモードの外観に圧倒されてしまつていた。

授業妨害を思い切り怒りつけるべきなのだが、相手が悪すぎた。超悪かもしれない、と思つたとたんに臆してしまつたようだ。

「疑うな。ワタシが鷹垣人美のままだと面倒なことになる。追われる身だからな」

その莫迦なせりふで、タキグチは確信を得たようである。人美の喋ることは、本人はあまり自覚しないが、独特の笑えるトーンがあるらしい。

「悪りーな！。ちよつと生徒会の大事な用事で、タキグチ借りるぜ」

人美は堂々とそばかす顔の女性教諭に向かつて宣言した。これくらいおおっぴらにやると、相手が気を吞まれてクレ

ームをつけないだろうと思ったのだが、図に当たった。

そばかすのある女性教諭はまだ若くて、超悪生徒の扱いには不慣れであった。思い切り旧弊な女子高制服を着込み、スカートのポケットに手を突っ込んでいる不良は苦手であった。

「時間はそんなにかからねー。いいから、授業続けて貰っていいんだよ」

にーなだつたら、もっと恐ろしい眼技を使うだろうと思つたが、ブラック・メイモードでは、その必要はなかった。女性教諭は言い返すこともしなかったからだ。

「センパイ、凄いですね。なんでこうなっちゃったんですか?!」

声が聞こえない距離まで行ってから、ひそひそ話になった。男顔の美少女タキグチの瞳はきらきら輝き、その高揚感に眩いほどであった。

「理由は尋かんでくれい。これには深いワケがあるのだ。犬神メイの遺伝子を貰うと、こーゆーことになってしまうのだ。それで勘弁しろ。ワタシが目下逃走中なのは知っているな?」

「もちろんです。それで、本当にセンパイ、マスカレードナイトだったんですね? すっげーかつこいいですよ! あたしもウクラクラしてます!」

「積もる話はまた後です。頼みがあるのだ。数あるコーハイの中で、とりわけオマエを見込んで頼む。オマエはも

し男なら、男伊達といういかしたタイプだ」

「なんでもおっしゃってください！ あたしはセンパイの全面的なサポーターですから！ 死ぬならいっしょです！ 起請文書きます！」

起請文というのは、昔、遊女が自分のマコトを客に見せるために書いた証文（血判をおす）のことだったな、と人美は思った。遊女のことだから、何十枚も書いて惜しげもなくばら蒔いたんじゃないかな？

「ありがとうよ。今後はおまえがワタシの連絡係だ。世界中の官憲に追われても、かならず生徒会長の責務は果たすつもりだ。おまえたちがしっかり補佐してくれば、ぜったいに出来る！ 自信があるのだ！」

「わかりました！ なんでもこのあたしにおっしゃってください！ センパイの留守はかならずしっかり守りますが、ら！」

「あー……つまり、だ」

人美がちらと振り向くと、生徒全員プラス体育教師が、目を瞞って瞬きもせずじいっとこっちを注視しているさまが目に入った。

人美は慌てて、口を男顔の美少女タキグチの耳元に寄せ、ひそひそ声で囁いた。別にそれほど用心することもなかったのだが、全員の注視を受けていると、つい聞かれているという意識になってしまうものだ。

「あ……わかりました。お貸しします、センパイ……」

男顔の美少女コーハイの声音も、はつきりと期待外れという響きを帯びていた。それはもお、大変な秘密の言葉を囁かれる、と覚悟していたからであろう。

「でも……なあんだ……済みません。もっと凄いことかと思いました」

「済まん。今度はかならず期待に応えるから勘弁しろよな。ワタシは今、一世一代のことをやらねばならんのだ」

「本当に？ ごめんなさい、別にセンパイの言葉を疑ってるわけじゃなくて」

「オマエたち可愛いコーハイの身の安全にかかわることなんだ。今は話せんが、いつかきつと」

「わかりました！ 楽しみに待ってますから！ このことはだれにも喋りません、安心してください！」

結局、人美の用件はその場では用が足りず、コーハイの男顔の美少女といっしょに、女子更衣室へ赴かねばならなかった。体育教師＋生徒全員が、啞然として両名を見送ったのは、いうまでもない。

「最初からこうすればよかったんですね」

男顔の美少女は、女子更衣室の鍵を差し込みながら、自分のお間抜けさを嘆くようにいった。

「そうすれば、ゆっくりお話できたのに」

「時間がないのだ。相当切迫している」

「センパイは追われる身なんでしょう？ お金とか隠れ家は大丈夫なんですか？ たいしたことできませんけど、少

しぐらいならお金もなんとかなりますよ。それに、箱根にウチの別荘があるんです。潜伏するには恰好の場所ですよ」

「ありがとうございます。オマエの親切には深く感謝する。だが、この恰好なら潜伏する必要はないと思わんか？ 大手を振って交番の前も歩ける」

「センパイ、どうしてそんなになってしまったんですか？ さつきからお話していると、たしかにセンパイだってわかりますけど、お顔を見るとガクツとなったりして。今のセンパイって、あのう、黒人ですよ？ なのにどうして金髪で眸の色が碧いんですか？ すっごく不思議なコーディネートですよ」

「これは遺伝子のせいなのだ。詳しいことはまたいずれ」「わかりました！ あの湘南海岸で大暴れした金髪の美少女マスカレードナイトも、やっぱりセンパイだったんですね！」

いきなりコーハイは人美の腕にしがみついていた。興奮を抑えきれなくなったのだ。

「そうでしょう、センパイ?! やっぱりそうだったんだ！ 前々から、そうじゃないかなあと思ってたんですよ！」

「実をいうとそうだ。オマエにだけこっそり明かしたのだから、秘密厳守だぞ」

「メタモルフォーゼのDNAですね。そのDNAって、犬神メイさんっていうかたから貰ったんでしょう？」

「これは秘密だが、そうなのだ。メタモルフオーゼって何だっけ？」

「変身です。狼男とか満月の夜にメタモルフオーゼしますよね。凄いなあ。センパイ、あたしもそのDNA欲しいです！」

またぎゅうつとしがみつかれた。女子更衣室だから、だれの目にも触れないという安心感のせいだ。可愛いコーハイにしがみつかれて嬉しいことは嬉しいのだが、やっぱり人美は自分が信用できない。ぎゅうつと抱きしめて、可愛がってしまうかもしれない。

「待て待て！ オマエはワタシの股肱ここうの臣だ。何も隠さずに話す時もくるだろうが、今は時間がない。暴れてる悪い



ヤツがいるから、マスカレードナイツとして、とっちめにかねばならんのだ……ケイタイ、貸してくれる？」

「わかりました、ケイタイですね。でも、トモダチからしよっちゅうかかってくるかもしれないんで、電源切っておいてください。だけど、あたしの電話だけ出てください」

それはちよつとむずかしい。特定の電話にだけ出るといふ機能つきなのだろうか。

「出来るんですよ。非常用のナンバーだけ、特別に立ち上がってくれるんです。今、設定しちゃいますから、ちよつとお待ちください」

この男顔の美少女タキグチは、切れ者だと思っていたが、その通りであつた。次期生徒会長は、文句なしにこのコーハイに決まりだ！

「すげーな、オマエは。天才だな。トリセツ見ないでもオツケーなのか」

「まかしてください。コーユーの得意なんです。ほら、これで完了」

偉いぞ、と褒めて、人美はぎゅっと相手の体を抱きしめてやったが、それはまるで愛犬にするような仕種だつた。

「嬉しいです、センパイ！ 約束ですよ！ 忘れたらダメですからね！」

力いっぱいしがみついてくる男顔美少女コーハイの体はいい匂いがした。いけねー、コーユーのって、男の子変身モードの前兆だよな、と人美は思った。すでに想念の言葉

づかいすらも男性化している。

「急ぐんだ、またな」

「あ、センパイ。副会長（オリベ）と喧嘩別れでもしたんですか？」

そのコーハイの言葉が、人美の足を停めた。

「なんだ？ 副会長（オリベ）がどーかしたか？」

「暗いですよ、あのひと。さつきちらつと顔をあわせたんだけど、口もきいてくれませんでした。鬱病みたいな感じでした」

「さつき？ すると、オリベは登校してるのか？ そんなに変だったか？」

「センパイに失恋したんだってみんな噂してます。でも、センパイ、副会長とそんな仲だったんですか？」

「冗談じゃない。オリベは悪いヤツじゃないが、思い込みが極度に強いのだ。幻想を抱いて、常に幻滅するタイプ……いるよな、ソーユーの」

「いますいます！」

「オリベはまじめでいいヤツなんだ。でも、マスカレードナイトには不向きだ。やむなく法律を破ったり過激なことをしなきゃならんケースもあるが、遵法精神が強くて、それができないものは、近寄らないほうがいいんだ。罪責感がどんどん強まって苦悩しなきゃならん。オリベをそんな立場に追い込むのは可哀相だ。ワタシみたいに脳天機で、あまり苦悩する能力がないヤツから離れたほうがいいの

だ」

「あたし、脳天機ですよ！ 苦悩する能力だって、自慢じゃないけどあんまりありませんから！ 楽しいことは忘れないけど、厭なことはすぐ忘れまます」

「人によつては、苦悩する能力が乏しいなんてゆーと、人間以下の生き物扱いするヤツがいるけどな。でも、苦悩するのがいいなんてマゾだと思うぞ。厭なことは即忘れて楽しく明るく生きることがなぜ悪い？」

「そうです！ 同感です！ センパイとやっぱりあたし気があつちやいます！」

「わかつてやってくれ。オリベはそつとしておいてやりた
い」

「わかります。センパイって優しいひとですね」

「なんかさあ、照れるんだけどね。ワタシって超不良になつちやつたんだよ。社会の法律かたっぱしから破つてしま
うし。でも、オマエたちコーハイのことは決して決して忘
れないから。機会があればこーして、姿を変えて会いに来
るから」

「センパイは、子犬を拾うと捨てられない人なんです
か？」

「な、なぜオマエ、そんなこと知ってるんだ?!」

人美は一瞬、うろたえた。もしかして、だれかに聞いた
のか？

「地獄の蜷川にながわから聞いたんです。いきなり声をかけられて

びびりました」

「えっ。にーながオマエに声をかけたって?! そんなん信じられん!」

「殺されるかと思いましたがよ。でも、そんなに恐くなくつた。それより、よく見ると地獄の蜷川って凄い美人ですね! あんなチヨー美人、世界中の芸能界見渡したっていませんよ!」

「そーか、にーながタキグチ、オマエに声をかけたか……何か用事があったのかな?」

「特にそういう感じじゃなかったです。鷹垣のコーハイかっつていわれて。その時につくづく顔を見られましたけど、人のいうほど恐くないなつて。物凄く眸が綺麗で、魂を吸い込まれるような気がしました。あれっと思っっていたら、センパイって子犬を拾うと捨てられないという話をされたんです」

「それは事実だが……なぜにーなはそんな話をオマエにしたのかな?」

「わかりません。情が濃いつてこともいってました。これっつて警告されたのかしらっつて考えましたけどね。やっぱり警告でしょうか?」

「さあ……にーなっつてきまぐれだから」

「センパイがマスカレードナイトになったのは、情が濃すぎるからだっつて。あ、やっぱり、警告ですよ。センパイは困っている人たち、迫害されている人たちを見ると、黙

っていられない正義感の持主だからって意味じゃないですか。子犬を拾ったら、捨てられないって意味、やっとなかりましたよ！」

熱心に喋りながら、擦り寄る男顔の凜とした美少女タキグチに、人美は困惑した。あまりにも接近されると、胸がどきどきする。危ない感覚である。

「そうだ、センパイ。今思い出したんですけど、このところセンパイに逢いたいって日参してる若いOLがいるんです。生徒会の人を探してるっていうので、あたし話をしたんですけどね」

「若いOL？ なんだらう？ マスカレードナイツのファンだとか？」

「もつと、なんかディープな関係みたいでしたよ。センパイと面識があるみたいです。どうしてもお逢いしたいといわれても、センパイは今行方不明だし、お引き取り願ったんですけどね。もしかしてお知り合いですか？」

(続きは正式版でお楽しみください。)

e文庫 <http://www.ebunko.ne.jp>

月光魔術團 III

幻魔大戦DNA1

悪竜ドラゴンの日 デジタル立ち読み版

発行日 2000年6月20日

著者 平井和正

イラスト 泉谷あゆみ

デザイン 伸童舎

表紙英文 エドワード・リップセット

発行 有限会社ルナテック

T125 0041

東京都葛飾区東金町3 13 6

info@ebunko.ne.jp

<http://www.ebunko.ne.jp/>

(C) KAZUMASA HIRAI, AYUMI IZUMITANI,
LUNATECH

本作品は著作権上の保護を受けています。本作品の一部あるいは全部について、無断で複写・複製・転載することは禁じられています。